

NEWSLETTER No.1

2010年3月発行

目次

創刊に寄せて	佐野賢治 (1)
報告：比較民俗研究会 100 回記念研究会	金 泰順 (2・3)
比較民俗研究会の展望	高倉健一 (4)
お知らせ	(4)

創刊に寄せて

比較民俗研究会代表 佐野賢治

比較民俗研究会のニューズレターが発行されるという。毎月一回の開催を目標に続けてきた研究会も 2009 年 12 月の会で、100 回を数えるに至った。参会者がほんの数人のときもあった。私が研究するというより信仰する虚空蔵菩薩の使わしめ、鰻のようにぬらりくらりであるがしぶとく続いてきたものである。「蔵すること虚空の如し」、入れても入れても、出しても出しても尽きない虚空蔵菩薩の徳にあやかり、何でも食欲に取り入れ学び、学んだことは広く公開することをモットーに、来るものは拒まず、去るものは追わずの自由さ、好い加減さが持続の力であったかもしれない。記念すべき第一回の研究会は 1989 年 12 月 20 日、発表者は、現愛知大学教授の片茂永氏であった。研究会記録を見ると、初期の発表者は今ではみな、国内外の大学をはじめしかるべき研究機関で活躍している。

また、研究会で発表し、参会者の質疑応答を経た論考を掲載することを原則とした『比較民俗研究』も 24 号まで刊行、次号で 25 号の区切りを迎えるという。当初は、日・中・韓の各国版をつくり、また持ち回りで国際研究会を開こうと意気軒昂であったがこれは実現していない。しかし、『比較民俗研究』1 号（1990 年 3 月刊）の巻頭言を書いている陶立璠教授らの尽力によりアジア民俗学会が設立され今日に至っている。

この機に至り、院生の間から比較民俗研究会を組織的に運営すべきだとの声が上がってきた。その一環として、研究会活動をこまめに知らせるニューズレターを発行したいという。待ち望んでいた意見でもあり大賛成であるが、誰でも自由闊達に論考が発表できる場としての研究会であり続けて欲しいと思う。継続は力である。

■ 報告 ■

比較民俗研究会 100 回記念研究会

報告者：金 泰順（キム テスン）

2009 年 12 月 6 日（日曜日）午後 15:00 から神奈川大学横浜キャンパス 20 号館で比較民俗研究会の 100 回記念研究会が開催された。比較民俗研究会は現在、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科の教授である佐野賢治教授が 1989 年筑波大学に在職した当時、日本、中国、韓国などの大学院ゼミ生が中心として発足した研究会である。



民族と国家の関係を異民族の生活文化の理解から接近しようという趣旨の研究会は月 1 回の発表会と年 1 回の研究誌の発刊を続け、今年で 24 号を発刊することとなった。

今回の研究会は「民俗学からみた東アジアの常民の生き方」というテーマで小熊誠教授（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科）とナランビリゲ（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程）の司会で 3 人の研究者が発表した。

開会の挨拶は佐野賢治教授より比較民俗研究会の沿革と趣旨説明などの挨拶が行われた。

引続き以下の内容の発表が行われた。

- 発表 1：蔡文高（国学院大学兼任講師）

テーマ：「中国における民俗信仰の復興 —福建省長汀県の事例を中心に—」

内容：現在、中国の自発的な民俗信仰の復元は民間によるものであり、信仰施設の修復は中国社会の変化により新たな信仰を生み出している。したがって神と神展様式と信仰形態は変化を招来することとなってきた。それを福建省長汀県の事例として調査分析した発表であり、変貌する中国社会の姿を論じた。



-
- 発表2：梅花（中国内蒙古大学民族学与社会学学院副教授、現在東京大学総合文化研究科派遣研究員） 中国語通訳：ナランビリゲ
テーマ：「内蒙古地区蒙古族仏教信仰現状 —トウレートゲゲンスムの事例を中心に—」

内容：チベット仏教は16世紀末、モンゴル地方に伝播された後、清朝、中華民国、新中国などの歴史を経て、モンゴルに広がり、また中断されている。ここでは20世紀（80年代）から復元されたあり様について概観した。内蒙古東北の興安盟ウランホト市のトウレートゲゲンスムの事例を取り上げ、現時点でのチベット仏教における寺院の復元、ラマ僧の情勢、民衆と宗教活動との関連、政府と寺院の関係などを考察した。



- 発表3：古谷野洋子（神奈川大学常民文化研究所特別研究員）
テーマ：「島々と海をめぐるモザイク模様のネットワーク—八重山諸島波照間島のカツオ漁と黒島のザコ獲りを中心に—」

内容：沖縄県最南端の八重山諸島は水のある「高い島」（西表島・石垣島・小浜島）と水のない「低い島」（竹富島・黒島・新城島・波照間島など）に分けられる。従来の研究では、主に高い島と低い島のネットワークが注目されてきた。しかし、昭和30年代の波照間島のカツオ漁と黒島のザコ獲り（カツオの餌になる）を通して、「低い島」どうしの八重山のネットワークの存在について考察した。



以上、3名の発表後には総合討論が行われた。

「民俗学からみた東アジアの常民の生き方」というテーマで開催された100回記念研究会の趣旨は世界常民の生き方を互いに理解し、様々な衝突と葛藤を解消し、民俗学の役目を果たすということである。今後、比較民俗研究会は日本・中国・韓国、各国の研究誌の交替発刊と研究会の交替開催を目指して研究会を続けるつもりである。

*本稿は『比較民俗研究 第24号』に報告したものを転載した。

比較民俗研究会の展望

比較民俗研究会幹事長 高倉健一

この比較民俗研究会は、発起人であり代表者の佐野賢治先生が筑波大学にて教鞭を執っていた1989年に発足し、2001年に現在の神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科に移った後も歴代の佐野ゼミ所属の院生らと共に研究会活動を続けてきました。

主な活動である比較民俗研究発表会は、1989年12月の第1回開催から月に一度のペースで継続して開催され、2009年12月にはついに第100回の記念研究発表会を開催するに至りました。これを記念して今回よりこの「比較民俗研究会ニューズレター」を発行することになりました。また、研究会誌である「比較民俗研究」は研究会発足以来今年度まで計24冊が発刊され、来年度には25号の記念号を発刊する予定となっています。

そこで今回、ひとつの節目として「比較民俗研究会幹事会」を設立し、これまで佐野先生と有志院生らで行っていた研究会運営を組織的に行っていくことにしました。

この幹事会は、現役ゼミ生や元ゼミ生などこれまで比較民俗研究会の運営に関わってきた有志らで構成されていて、研究会の発展のために研究会運営を効率的に行うことを目的として設立され、また佐野先生の年来の構想である比較民俗学会設立のための基礎組織としての役割を担うことも目指しています。

今後この幹事会のメンバーを中心に研究発表会の開催や比較民俗研究の発刊、ニューズレターやホームページによる研究会の広報活動を行い、研究会の更なる発展のために尽力していく所存です。

お知らせ

第101回比較民俗研究会が1月12日に行われ、高城玲氏(神奈川大学経営学部準教授)による「タイにおける相互行為と社会秩序-人類学的研究の視点から-」の発表がありました。詳細は次号にて報告いたします。

比較民俗研究会ニューズレター 創刊号

編集・発行 比較民俗研究会幹事会(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科佐野研究室) 連絡先: hikakuminzoku@hotmail.co.jp

*編集担当者 古谷野洋子・金泰順